

---

# ゼロの使い魔、たっくんが使い魔になりました。

セラフ零

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔、たっくんが使い魔になりました。

### 【Zコード】

Z3760Z

### 【作者名】

セラフ零

### 【あらすじ】

ただ単にゼロの使い魔でルイズがサイトの変わりにたっくんを召喚してしまいましたってだけです。

割とタイトルの割には中一要素が満載です。

主にシリアル的な意味で。

555は好きだけど話の流れは小学生のとき以来なのでつら覚えです。

設定をウイキで調べながら行きます。

ただの思い付きです。

## 出会い、召喚と狼と仮面

……ここは何処だ。

一人周囲を見回してそう思う。

確かに自分はあの時灰に成り果ててしまつたはずだった。  
だというのに何故ここにこうして立つているのだろうか。

目の前には桃色の髪をした少女が一人。

その周囲には彼女と同じ年代と思われる少年少女たちが一様に自分のことを見ている。

服装から推測するに、彼女たちはおそらく学生なのだろう。  
一人だけいる頭の輝くおっさんは引率の教師と見たほうがいいだろう。

なにやら桃色の髪の少女が頭の輝く男に何かを訴えているかのよう  
だがそれは聞き届けられなかつたらしい。  
肩を落とし、少し赤くなりながら彼女はこちらに近づいてきた。

「感謝しなさいよね。貴族にこんなことをされる事なんて、ないんだから」

何を言つたのかは解らなかつたが何かをしようとしているのは解る。

「おーお前ー 一体何を 」

彼がその言葉をつむぐ前にその口は少女の口で塞がれた。  
唐突の事に驚きで言葉を失つた。

そして我を失つて いるその一瞬の後に彼の体に異常が起つる。  
左手の甲から全身に広がる苦痛。  
焼けるような痛み。

何かが刻み込まれるかのような、そんな痛み。

まるで自分の体に烙印を押されるかのよつた、そんな至な苦痛に彼  
は耐える事が出来ずに気を失つてしまつ。

この邂逅が何をもたらすのか。

今はまだ、誰にもわからない。

## 出合い、召喚と狼と仮面（後書き）

さて、オリジナルの展開にするか。  
ある程度原作に沿ったシナリオにするか。  
ゼロ魔王は全部読んでないから無理だろうしなー。

## 異なる世界の異なる人間（前書き）

たつた一話分の話を作るのにこれほど時間がかかるとは。  
うる覚えで書くのは良くないね。

アニメを見ながらだし。

しかもたつくんの性格は忘れてるし。

サイト……実は君も入れたかつたんだ。

でも、君を化け物にするには些かあれだつたのだよ……そして君  
と巧が一緒にいられる理由が見つからなかつたんだ……。  
「めんよ。本当に」「めんよサイト……。

## 異なる世界の異なる人間

「夢を持つとね、時々すっぽり切なくて、時々、すっぽり熱くなるんだ」

「夢つてのは呪いと同じなんだ。途中で挫折した人間はずっと呪われたままなんだ」

「俺には夢がない。でもな、夢を守ることは出来る」

「俺はもう迷わない。迷っている内に人が死ぬのなら……」

「戦うことが罪なら 」

夢を見た。

ひどく懐かしい夢だ。

あれは自分が人として戦う力を得た頃の記憶。

赤いフォトンストリーム、銀色の装甲、黒いスース、黄色の複眼。  
まるで英雄のヒーローのような姿となつて彼が対峙していたのは、灰色の化け物と呼ぶに相応しい生物。

何故今更こんな夢を見たのだろう。

まるで走馬灯のよう。実際彼は死んでいるのだから間違いはないだろう。

「やつと起きたのね」

巧が目を覚ますとそこはどこかの部屋だつた。

昼間いた場所は広場だつたから運ばれたのだろう。黙つて彼は周囲を見渡す。

ベットにクローゼット。小さなテーブルが一つ。

おそらくこには彼女の部屋なのだろう。

小ぢんまりとした部屋だ。シャワールームがないどころか、電気も

ない。部屋に明かりを灯しているのは蠟燭のみ。

「おいお前。お前は一体なんだ。ここは一体何処なんだ」

「まったく、貴方を運ぶの大変だつたんだからね。あんなところで氣を失つて。ご主人様にいきなり迷惑をかけてから」

巧の言葉など聞こえてもいかの様に、彼女はただ一人話を続ける。

「お前いい加減にしろ。人の話を聞け！」

彼が叫ぶとルイズは鬱陶しそうに頭を左右に振る。

「ああ、もう。五月蠅いわね！　ええつと、確か沈黙の魔法を……」

彼女はそういうと、きこちない口調で呪文を唱える。当然の如く魔法は本来の意図に反し爆発を起こす。それに驚くことも無くルイズはケホツ、と咳を一つする。

「お前は俺を殺す氣か！」

突如と起きた爆発に驚きながら怒鳴りつける。

え？　と。彼女はきょとんとした表情で巧の顔を見る。

「というか、一体何が起きたんだ！　何も無い所から爆発が起るなんて」

「解る！」巧の言葉をさえぎつてルイズは声を上げる。「あなたの言つてることが解るわ！」

「ああ？」

それに対する怪訝そうな表情をする巧。

今まで自分の言葉は理解できていなかつたとでも言つのだらうか。だとするのなら問い合わせても鬱陶しがるだけで相手に伝わらないのも理解できる。

面倒くさがりに頭をかくと、溜息を一つ吐いた。

「で、ここは一体何処なんだ。そもそもお前は俺のこ主人様とやらじゃないだろ」

その場に座り込みながら、巧は尋ねた。  
ちらりと左腕も確認しながら。

「ここはハルケギニアにある、トリステイン魔法学校よ。あんたは私の使い魔として召還されたの。それより、あんたの名前をまだ聞いていなかつたわね」

「人の名前を尋ねる前にまずは自分の名前を名乗つたらどうなんだ」「……態度は気に食わないけど。まあ、良いわ。私の名前は、ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールよ」

「本当に外人みたいな名前だな。の癖に日本語しゃべれるじゃなねえか」

「さつさとあんたの名前を言ひなさいーーー」

「俺の名前は乾巧だ」「変な名前ね」

「無駄に長いお前にだけは言われたくないねえ」

鼻で笑いながらさりげなく巧。正直さでも良いのだと、名前のことなんて。

「全く、どうして私の使い魔がこんな礼儀もなつていないただの平民のかしら」

うんざりした風に彼女は肩を落とす。

全くもって心外だ。此方は好きで呼び出されたわけではない。むしろ迷惑しているのだ。

普通の人間ならこんな性質の悪い宗教か何かだと思うはずだ。それ以前にこんなものは明晰夢の類だと思うに違いない。

一瞬だが巧もそれに順ずるものか何かだと思ったのだ。

だが肉体に至る痛みは現実のもの。それはこれが現実であるという覆しようのない事実。

それに、彼自身がまるで悪夢のような体験をしてきたのだ。死者が化け物となつてよみがえるなんて。ビックリのB級映画じゃあるまいし。

「俺が知るかよ。つたく……」

溜息を一つはくと、そのまま元いた場所で横になる。

「ちよつと、話はまだ終わつてないわよー。」

「つむせえな。もう寝かせろよ。色々あつて疲れてんだよ

それつきり巧はなにも言わなくなつてしまつた。

どうやら本当に寝てしまつたのだろう。

溜息をはくとそのまま彼女も着替えて寝ることにした。

この使い魔に振り回されてばかりでルイズ自身も疲れたのだろう。

すぐにはまどろみくと意識を手放してしまつた。

そして翌朝。

「朝よ、早く起きなさいー。」

能天気なのか凶太いのか、敷き詰められた藁の上で寝転がつていた

巧を起こす。

うなり声を上げながら、巧はゆっくつとその体を起き上がらせる。この状況で十分な休息を取る事ができるなんて、どれだけの凶太い神経をしていいのだろうか。

「まつたぐ」主人様よりも長く寝るなんて。出来損ないも良いところだわ」

「だから俺はお前の使い魔とやらになつたつもりはねえ」

面倒くわざつに彼は言つ。

「黙りなさい。貴方の左手に刻まれているルーンがあんたが私の使い魔である何よりの証拠じやない！」

ルイズは怒鳴りつけると適当に引つ張り出した制服を巧に投げつける。自分の下着もついでに、だ。

「おい、こいつは一体何のつもりだ」

「私に着せるのよ」

「はあ？ そのくらゐ自分でやれよ」

「普通貴族は召使を抱えている場合、自分で着替えなんてしないのよ。わかった？」

「ふん、つまりは自分では何にも出来ない役立たずって事か。だから着せ替え人形みたいな事が出来るつて事か」

「へえ、ああ、そう。じゃあ貴方には罰を「えないとね」

少しばかり考え込むと彼女はすぐに答えを出した。

「そうね、これから貴方に朝食を出そうと思つていたけれど、そんな態度を取るようなら」飯はなしで良いわね

どうやら彼女が考え付いた罰というのは食事をなしにするといつものらしい。

彼も生物である以上、空腹には勝てないと判断したのだろう。普通ならそうだが、乾巧という人間は違つた。

「ああ、別に構わないぜ。俺は俺で、食料を調達してくるからな

そんな軽口をたたくと、彼はゆっくりと立ち上がって扉へ向かう。

「ちょっと、一体何処へ行くつもり？」

「言つただろ。俺は俺で調達してくるつてな」

「使い魔がご主人様のそばを離れる気ーー？」

「だから何度も言わせるな。俺はお前の使い魔じゃねえよ

それだけ言つて部屋を出ようとしたその時だった。

背後から突然首に枷をつけられたのだ。鎖のついた首輪。さながら犬のようなそれを手で触つて確認する。

「一体なんだよこれは！」

「私の使い魔が勝手に行動しないようにするための鎖よ。まったく。念の為に準備しておいて正解だったわ」

「俺は犬でもねえぞ！」

「黙りなさい。貴方はそれをつけていれば良いのよ

ふざけるな！ と巧は怒鳴りつけた。けれどリーズは何処吹く風か、平然とした態度で鎖を引っ張つて柱にくくりつけた。

その気になれば巧はこんなちやちな鎖一本引きちぎれない理由がない。

だがそれをする為に力なんて使いたくないのだ。

自分が忌み嫌う力を。

巧がその場に座り込んで黙りこくっている内に、ルイズは制服へと着替える。

目の前に男がいるなんて意識すらしていない。ただ、そこに物がある程度の認識に過ぎないのだろう。

手早く着替えると、そのまま鎖を引っ張つて部屋を出る。てこでも動かないつもりだったが、思ったよりもルイズの力が強くて仕方なしについていくしかない巧であった。

「おい、これから一体何処へ行くんだ」

「五月蠅いわね。朝食よ」

「は、食事抜きの俺に自分たちの食事を見せ付けるってか」「それは貴方が悪いのよ。貴方が私に従えば、最低限の食事、生活は確保してあげると言つてるの」

「それで俺に使い魔をしろつてか？　こんなわけも解らない世界にまできてどうして訳の解らん事をしなけりゃならねえんだよ」

「良いから黙つてついてきなさい。どうせ、貴方は元の世界に戻る方法なんて無いんだから諦めて私の使い魔をしたほうが賢いと思うけど」

「……別に俺は元の世界に戻りたいって訳でも無いけどな」

「何か言つた？」

「別に」

「不服があるなら勝手になさい。私だって別に好きであんたを召喚した訳じゃないんだから」

「そうかよ。こっちも良い迷惑だぜ。折角人が感動的な別れをしていたつて時に」

「別れ？　あんた一体何をしてたの？」

「色々だよ色々」

「その色々つて何よ。気になるじゃない」

「別にお前やこの世界には関係の無い話だ

全く持つてその通り。

この世界に灰色の化け物はいないし、そもそもあのベルトも此方には無い。

今更、昔のことを語った所で何の意味もない。  
どうせ、この世界からしても荒唐無稽な話だ。

田の前のこの自意識過剰な少女が信じるとは思えない。  
あの世界は今、どうなっているのかは気になるのだけれども。  
前までなら、彼はどうでもよかつたのだろう。  
でも、夢が出来た今の彼には、気になって仕方が無いのだ。

(夢は呪いと一緒に……か)

ふと、そんな言葉を思い出した。  
確かに意味は解った。

その夢を実現する前に、自分は自分という存在を失ったのだから。

「だから、そんな言い方をされると余計に気になるじゃない！」「  
良いだろなんだって。話したところで俺の待遇が変わるわけじゃないんだから。それに一体お前と何の関係があるってんだ」  
「関係あるわよ。使い魔は一生変える事が出来ないの。つまり、使い魔のことを知るのは主人としての義務よ」  
「そうかよ。俺は話したくないがな」  
「（主人様の……つてあんたに言つても無駄だつたわね」

溜息をはくとそのまま先へ進んでいくルイズ。

その後ろを巧は不機嫌そうな表情でついていく。

今更、あんな話をしたところで本当に何になるというんだ。  
あんな凄惨な、下らない人間の物語を。

やがて食堂までたどり着くと、一斉に好機の瞳が一人に降り注ぐ。

「噂の人間の使い魔だ」

「思つていたよりも結構格好良いわね」

「でも鎖なんて」

「よつほど暴れたんだろうな」

「所詮は平民の使い魔だな」

「品性のかけらも無い」

「格好もみすぼらしいですし」

「僕の美しさには到底及ばないさ」

それぞれが好き勝手に言葉を口にしていく。

それを聞こえないフリをしながらトつありは歩いていく。

「ほら、早く椅子を引きなさいよ。気がきかないわね」  
「お前が立派なレディって奴だったら、気を利かせてやっても良いがな」

そんなことを口走りながら、巧は椅子を引いてやる。

しかし、朝から随分と豪勢な食事だ。

貴族とやらは朝からこんな豪勢な料理を食べているのか。  
まったく金の無駄遣いだ。こうじつた所で細やかな節約が行えない  
から、金策に困つたりもするのだ。

「本当なら使い魔は外で待機させるのだけど、特別に一緒にいわせ  
ているだけでもありがたいと思いなさい」

「ああそりがよ」

鼻で笑つてそっぽを向く巧。

まったく、この田の前の桃色の髪をした娘の気位の高さには辟易す

る。

これだつたら、園田真理のほうが幾分かまともだつた。  
食事が始まる前に全員が両手を組み合わせ、目を閉じた。  
漫画やテレビで見たことがあるが、実際に目で見るのは初めての光  
景だつた。

「偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ今朝もささやかなる糧を与え  
たもうた事を感謝します」

こうじつた宗教じみたことをやるのは初めて目にする。  
下らない、巧はそう感じた。

ささやかなる、なんて持ち得ないものからすれば豪勢なことだ。  
実に自分本位で勝手な言い分だ。

それに神なんているものか。

いるのだとすれば、今すぐにでも自分を生き返らせて欲しい。  
なんて下らないことを考えながら空腹に耐える。

幾ら彼でも食事抜きというのは、少しつらいものがある。  
目の前では自分よりも年下の少年少女たちが豪勢な食事を取つてい  
るのだ。これでイラつかない人間がいたら見てみたい。  
かちやかちやと食器が音を立てていく中をただ一人、巧は黙つてみ  
ていたのだった。

食事を終えると外へ庭へと出て行く。  
食後の散歩という奴だろうか。

石で作られた階段を下りていくと、芝の生い茂る中メイドが給仕を  
し、テラスで優雅に会話を楽しむ生徒たちがいた。  
その傍らには、今まで見たことも無いような生物たちもいる。

「今日は一年生の授業はお休みなのよ。召還したばかりの使い魔と

「ハイニーーションをとるのよ」

「……俺は頼まれたつてごめんだがな」

心底気持ちの悪そうな顔をしながら巧はそう呟いた。

中には犬のような使い魔もいる。

それをまじまじと見ながら溜息を吐いた。

あんなことをされてたまるか、という思いが思いつきり伝わってくる。

「あら？」ふと、声がかかる。

その声に振り返ると、真っ赤なトカゲのような何かを撫で回している褐色の美女がそこにいた。

巧が少し驚いたような表情をして唸ると、彼女は微笑を浮かべながら話しかけてきた。

「貴方サラマンダーを見るのは初めて？」「サラマンダー？」

本当に人間という使い魔の特異性がよく解る。こんなのが普通にいるのだから。

「そんなモン、俺みたいにつないでおかなくて平氣なのか？」

「あら、契約をした使い魔は主人に忠実なの。別に貴方のように鎖でつながなくとも平氣なの。暴れたりも逃げたりもしないし、ねえーフレイム？」

彼女の問いかけに返答するかのように無くてトカゲ。

どうやら彼女のこととおりらしい。どうやら知能はそこまで高くはないようだ。故に、使い魔として忠実に言つことを聞くのだ。勝ち誇ったような笑みを浮かべる彼女にルイズは「余計なお世話よ！」と怒鳴りつける。

なにやら悔しいのだらうか。

「ねえ、貴方最初からその辺を歩いていた平民をつれて来たんじやない？」

立ち上がって挑発的なことを言つ少女。

「爆発で上手く上手く誤魔化したか？」

「違うわ！ ちゃんと召喚したのに、ここにが来たやつただよー。」

「ま、ゼロのルイズにはお似合いよねえ」

小ばかにした風に笑い声を上ると、そのまま立ち去っていく少女とサラマンダー。

おーほつほつほ、なんて笑い方をする人間がいるなんて。

まさに異世界、しかも魔法やら貴族といふ言葉がある世界だ。

「何なのあの女ああ！」

握りこぶしを作つてルイズはそつ懶る。

そしてその怒りは巧に向く。

「ほやつとしてないでお茶ぐらに持つてきなよー。」

「鎖で行動制限している奴が何を言つやがる」

「ああもうー、ほやつ、その鎖を取つてあげるかー。」

そういうと彼女は懐から鍵を取り出して、巧の首輪を取り去つてやつた。

持つていたところとまつでも外せるようにしておいた、ということになる。

もしかしたら、この少女思つているよつもやさしいのかもしない、

なんて巧は思つてしまつた。

「ほり、早く行きなれー。」

「はいはい」

彼女にせかされて自由になつた巧は歩いていく。

溜息をはきながらけだるげな表情で、ぼんやりと歩いていると、一人のメイドにぶつかってしまった。

「悪いな」 そういつてメイドに手を伸ばす。

「いえ、私も前をよく見ていなかつたので」

そう言いながら彼女は立ち上がる。

傍らには地面に落ちたケーキが。

それを皿の上に戻すと、メイドが何かに気がついた様に話しかけてきた。

「あの、貴方もしかしてミス・ヴァリエールの使い魔になつたつていつ……」

「俺のこと知つてゐるのか?」

「ええ、平民が使い魔として召喚されたつてもう尊になつてますから」

成程、先程も思つたがやはり人間が使い魔になるという事は特異な事らしい。

一日で一介のメイドにまで話がつたわつてているのだから。

「ま、俺ひとつては貴族とか平民とかよく解らんが」「魔法が使えるのが貴族で、使えないのが平民なんですよ?」「へえ、成程な」

だからあそこまでみんな気位が高そつだつたのか。

「お前は魔法が使えるのか?」

「とんでもない。私はここでじつ奉仕させていただいているだけの貴方と同じただの平民ですわ」

こんな世代の変わらない少女が給仕をしなければならぬことは。どうもやはり常識というものが違うらしい。

アルバイト的な感覚なのだろうか。  
いやいや、自分の世界ではこの年頃は大体、高校に通つているのが普通だ。

こんな所で働いているなんて、あまり聞いた事が無い。

「おーい、ケーキはまだかい」

気障つたらしい話し方で声が聞こえてきた。

どうやら、このケーキを待つていたのは、あそこになにやら毛むくじやらの生物をひざに乗せて女子と会話していた金髪らしい。

「はーいただいま!」

目の前のメイドはそりそりと、そのままケーキを取替えに行こうとする。

巧は一言がんばれよ、とだけ声をかけると自分も本来の目的を達成しようと移動を開始する。

その途中で「ギーシュ様……」などと呟く栗色の髪の生徒が通りかかった。

それと同時にやたら慌てた風に移動を開始する金髪少年。  
ここで巧の脳裏に妙な考えがよぎる。

「もしかして、お前の探しているギーシュって奴は金髪の男か？」

「え、ええ」

「だったらむしろにいたぞ」

巧が指した方向にギーシュの姿を見つけた少女は、満面の笑みで向かっていく。

それに慌てた風にギーシュは苦笑いする。

その光景をしばらく眺めていた巧だが、やがて「嘘つきー」という言葉と同時に平手打ちを食らって弾き飛ばされるギーシュを見て思つた。

何処でも女つて生き物は強いものだ、と。

二人が去つていくと周囲から笑い声が響く。

「ふられたなあ、ギーシュ。ま、自業自得だけじさー。」

小太りの少年が嘲笑しながらギーシュにそうこいつ。

その通りだ、なんてぼんやり思いながら彼のことを見ていると、ギーシュは巧をにらみつけて立ち上がった。

「どうやら、君は自分の立場が解つていなによつだな」

意味が解らない。

「おいおい、ただのハツ当たりならどつかに行つてくれ

「君は貴族に対しての礼儀も知らないよつだ」

「そつかよ。俺は別にそんなものを必要としなかつたからな  
「よからう、君に決闘を申し込む！」

「決闘？」

「その通り。君に決闘を申し込む」

とつとつ頭でも茹で上がったかこの氣障つたらしい馬鹿は、なんて思いながらギーシュの会話の続きを聞く巧。

「君は平民の、それも使い魔の分際で僕を侮辱し、あまつさえ一人のレディをも泣かせたッ！」

芝居じみた手振りでそういうギーシュ。

貴族つてのはこいつも頭の中身が残念なのだろうか、などとほんやり聞き流す巧。

今やるべきは自分の「主人様気取りの桃色髪にお茶を届けること」なのだが。

「泣くどじろが、起こつていた風に見えるがな。それにそれは俺のせいじやねえ、お前が一股をかけるのが悪いんだろ」

その言葉に再び周囲から嘲笑が沸き起つる。

「ツ覚悟は良いなー、ヴェストリノ広場で待つてる」

最後まで気障つたらしい動作で去つていぐギーシュ。

ただの馬鹿だろうが、売られたけんかは買うほかあるまい。それに、あんな言いがかりをつけられて黙つていられるか。

「あんた！ なにやつてゐのよー！」

巧の腕を引っ張つてその場から移動するルイズ。何処からか見ていたのだろう。

「なんだよ。お茶なら

」

「難だよじや無いわ！ 何勝手に決闘の約束なんかしてんのよ…」  
「で、何処に行くんだ？」

「ギーシュに謝るのよ。今ならまだ許してくれるかも知れない」

「嫌だね」

そういうと巧は足を止めた。

「別に俺は何一つとして悪いことをしたという気はない。ただ、あいつが自滅しただけだ」

「あんた、何もわかつてない… 平民は貴族に勝てないの。怪我ですめば良いほうなんだから！」

「怪我ですめば良いほう、ね」

今更だ。と彼は咳くと先程ギーシュに話しかけていた小太りの少年に場所を尋ねる。

彼は面白そうにその場所を告げると、巧は礼を言つてその場所へと向かつて言つた。  
よほど退屈していたのだろう。

「マリ「ルヌ！」 ルイズがどがめるように声を上げるが、とき素手に遅し。

巧は走つてその場所へと向かつていくのであった。

「いやあ、これは見物だねえ！」

なんて笑いながら言つマリコルヌとは対照的に、ルイズは眉間にしわを寄せて、

「もつつ… 使い魔の癖に勝手な事ばかりするんだから…」

と西さんで巧の後を追いかけていくのであった。

## 異なる世界の異なる人間（後書き）

いや一面倒だね。

本当に。因みに他のライダー登場はディケイドだけを考えています。  
一応、話の都合を付けるために、だけどね。  
さて、ファイズギアを何て名前にしようか。

灰にする演出つて無機物に対しても有効だつける?  
あれ、割と気に入ってるんだけど。

小規模な爆発が起こつた後に紋章が刻まれて、そのまま灰になつて  
崩れ落ちる。

サイガ戦のときとか特に。

そんなこんなのでんびり続いていきます。

次は決闘です

open your eyes for the next f  
a i z .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3760z/>

---

ゼロの使い魔、たっくんが使い魔になりました。

2011年12月31日17時37分発行